

# 多義動詞「トル」の内項共起制限 —クオリア構造を用いた分析—

崔 蘭亭

神田外語大学大学院

## 要旨

本稿は、生成語彙意味論の枠組みで、「トル」と対象目的語の語彙構造との意味計算を行い、「トル」の内項共起制限と、多義間の関係を明らかにし、「動詞の多義は動詞の単一の意味と、それと共起する項を含むクオリア構造の計算によって派生される」という同理論の基本仮説を裏付けるものである。本稿の分析対象は、「トル」が単一タイプの項を持つ対象と共起する場合に限定する。そして、対象の形式役割に含まれる情報、または目的役割に含まれるイベントのいずれを項とするかにより、その意味解釈が「獲得」「除去」「操作」という3つの意味群に分かれることを明らかにする。そして、この三つの排他的に見える語義のうち、「除去」と「操作」は、「トル」が持つ「獲得」の語彙構造と目的語名詞が持つクオリア構造の計算によって派生される。

キーワード：クオリア構造、多義語、語彙意味論、共起制限、意味計算

## 1. はじめに

生成語彙意味論では、多義的に解釈される動詞は、一つの基本的意味を内包するが、それと共起する名詞句のクオリア構造との意味計算によって、多義が派生すると主張している<sup>1</sup>。本稿は、この主張に基づいて、日本語の多義動詞「トル」を生成語彙意味論の枠組みで詳細に分析し、「トル」の多義的な用法が「獲得」という一つの意味から目的語名詞の意味との計算によって派生されることを明らかにする。

「トル」の多義派生について、国広(1997)は「トル」の基本的な意味を「把握」、「獲得」、「離脱」という3つの認知的な要素を持つ現象素として捉え、心理的にその現象素のどの部分に注目するかによって「トル」の解釈が異なると主張している。その後の「トル」の多義性に関する研究は国広(1997)を出発点にし、認知意味論の枠組みの中に受け継がれ、「トル」の基本的意味をより抽

象的に捉えて、「トル」が表す動作行為どの部分が認識されるかによって「トル」の多義的な用法が生じているとしている（松田2006など）。本稿は、Pustejovsky（1995、2011）が提案した生成語彙意味論のクオリア構造を用いて、「トル」とその目的語名詞句の語彙構造を提案し、それらの意味計算により「トル」の内項共起制限を明らかにすることを目的とする。

本稿の構成は、次の通りである。第2節では、『日本語基本動詞用法辞典』における「トル」の文型を参考にし、「トル」の多義的な用法を整理する。第3節では、「トル」に関する先行研究を考察する。第4節では、生成語彙意味論の理論的枠組みを紹介する。第5節はクオリア構造と項同定を用いた分析を行い、「除去」「操作」という意味がどのように「獲得」という1つの意味から派生するかを明らかにする。最後に、第6節を結論とし、本稿のまとめと残された課題について述べる。

## 2. 「トル」の文型と意味解釈

日本語の「トル」は用法が非常に多い基本動詞の一つで、様々な辞書において異なる観点から分類されている。そのうち、『日本語基本動詞用法辞典』は構文の観点から「トル」の意味を20種類の別義に分類し、それぞれ適用される文型を掲載している。これらの文型を（1）にまとめる。

- (1) 文型1：AがBをとる。  
 文型2：AがCから（Cの）Bをとる。  
 文型3：AがBをDにとる。

同じ文型においても、「トル」の解釈が同様であるとは限らない。例えば、文型1では、「トル」の対象によって、「①AがBを自分のところに移動する」、「②AがBを自分のものにする」、「③AがBを取り外す」、「④AがBの操作や役割を実現する」という4つの解釈が可能である。具体的な例を（2）に提示する。

- (2) a. 父はテーブルの上の書類を（手に）取った。  
 b. 彼は車の運転免許を取った。  
 c. 母は鍋のふたを取った。

d. 子供たちは相撲を取った。

(『日本語基本動詞用法辞典』1989:362-364)

(2a) は、文型1の「AがBを自分のところに移動する」という解釈に当てはまるもので、Aは動作主、Bは目的語である。そして、Aに「父」、Bに「書類」が代入されると、文の意味が「父はテーブルの上にある書類を自分のところに移した」になり、「トル」が「対象物を空間的に動かす」動作を表すことになる。それに対し、(2b)における「トル」は抽象的な移動を表し、文の意味は「彼は車の運転免許を自分のものにした」で、文型1の②の解釈になる。

(2c) の「トル」も対象物を動かす動作であるが、対象を自分のところに移動するのではなく、それをもとにあるところから離す、「取り外す」という意味である。つまり、(2c) は文型1の③の解釈、すなわち「母は鍋からふたを外した」と解釈することができる。ただし、次の(3)は、(2c)と同様に「③AがBを取り外す」と解釈されるときも、同じ用法とは言えない。

(3) 太郎は先生の前で帽子を取った。

(片山2005:343)

片山(2005)は(2c)における「トル」の用法は他動詞としての用法で、(3)における「トル」の用法は再帰動詞としての用法であると述べている。また、再帰動詞はその対象の移動の着点または起点が常に動作主の自分自身であり、動作主の動作が常に動作主自身の状態変化を引き起こすと述べている。(2c)では、母は瓶からふたを外しても、母自身の状態変化を引き起こさない。それに対して、(3)では、太郎が帽子を脱ぐと、太郎自身が「帽子を被っている」状態から「帽子を被っていない」状態になる。本稿では、(2c)における対象の移動を「元の場所からの移動」、(3)における対象の移動を「動作主からの移動」と呼ぶことにする。

また、「トル」の目的語は物や資格などを指す名詞のみでなく、「相撲」のような出来事を指すものもある。この場合、(2d)は「子供たちが相撲を移動する」ではなく、「子供たちが相撲をする／相撲という出来事を実行する」と解釈される。この「トル」は前の3つの例と異なり、「対象物を移動する」のような解釈にならず、「対象物に含まれる出来事を実行する」という解釈になる。なお、

この場合の「トル」の対象は「相撲」や「事務」などのような出来事のみでなく、「舵」や「ハンドル」のような物体でもあり得る。その例は『日本語基本動詞用法辞典』で取り上げられていないが、『例解同訓異字用法辞典』で列挙されている。(4)を参照されたい。

(4) 船長は舵をとる。 (『例解同訓異字用法辞典』2003:346)

(4)の「舵」は船の一部分で、簡単に移すことのできないものである。そして、「舵」は船を操縦する上で不可欠な道具である。そのため、「船長は舵をとる」は、「船長は舵を操る」または「船長は船を操る」という意味になる。当然、コンテキストによって、「舵をとる」は「舵」それ自体を移動する場合もある。例えば、船長が船を修理して舵を取り換える場合、(4)は「船長が(船から)舵を取り外す」と解釈することができる。ただし、この解釈になる場合、「船から」といった起点を示す副詞修飾節が常に文の中に現れる。つまり、(4)のような文はこの多様な解釈にならないために、「対象を移動する」意味を表す場合には、文型1より、文型2の形で現れる可能性が高い。

ここまでで、文型2、3は全て文型1の変形であることがわかってくるだろう。文型2は移動の起点が文中に現れる場合、文型3は移動の着点が文中に現れる場合である。

次に文型2の例文(5)と、文型3の例文(6)を検討する。

- (5) a. 砂漠の動物はサボテンから水分を取る。
- b. 腕から包帯を取る。
- (6) a. 客は料理を皿に取った。
- b. 記者は現場の状況を写真に撮った
- c. 師匠はその青年を内弟子にとった。

(『日本語基本動詞用法辞典』1989:362-364)

(5)における「トル」の解釈は対象が動作主に有用であるか、邪魔になるかによって異なる。(5a)では、砂漠の動物にとって、水分は生きるために不可欠なものである。それを利用するために、サボテンから引き出して自分のと

ころに移動する。(5b)では、包帯は怪我をした時には必要なものであるが、治ったり、取り換えたりする時には使用済みの包帯がいらなくなる。「腕から」という移動の起点を表す名詞句から見ると、この包帯は腕に巻いてある使用済みのもので、外す必要があるため、この「トル」は「取り外す」という意味になる。(6)の各例文は一見すると全て同じ文型であるが、そうではない。(6a)では、「皿」は「客」が手に持つ皿で、「客」の手の延長線上にあるとみなすことができる。この場合、「二格」は移動の着点を表す格助詞である。この「二格名詞句」を省略しても、文が成立し、意味も変わらない。それに対し、(6b, c)では、「写真に」「内弟子に」が省略されると、非文になる。それは(6b)においては、「現場の状況」は実在物ではない、より抽象的状況や情報などであって、それを保持するために何かの形や物体を媒介しなければならないからである。「写真」は「情報」を記録している媒体であり、この文にとっては付加要素ではなく、必須要素である。一方、(6c)は、判定詞の連用形で、構文が異なるため、本稿の研究対象外とする。

(5)と(6)は、「トル」を含む動詞句では、起点を表す「カラ格名詞句」は文中に現れることができるが、着点を表す「二格名詞句」は文中に現れるのが限られていることを示している。つまり、移動の着点が動作主の手の延長線上にある場合と、その着点が記録媒体にある場合以外、着点を表す「二格名詞句」が文中に現れるのは基本的に非文法的である。例えば、「\*ごみをゴミ箱に取った」、「\*太郎が包丁立てから机の上にナイフをとった」のような文は「二格名詞句」があるため不適切である。なお、本稿では、(6a)のような文と文型1の①と②の解釈になる文を合わせて、それらの文にある対象の移動を「動作主またはその延長線上への移動」と呼ぶことにする。

本節をまとめると、「トル」の対象は移動できるものと、移動できないがその操作や出来事を実行するものに分けられる。また、移動可能なものの移動はさらに、「動作主またはその延長線上への移動」、「元の世界からの移動」、「動作主からの移動」という3種類に分けられる。

次の節では、「トル」に関する先行研究を紹介し、それぞれの貢献と限界性を考察する。

### 3. 先行研究

「トル」の多義研究は、国広（1997）を出発点とし、認知意味論の枠組みの中で議論が進められてきている。この節では、これらの研究を概観する。

国広は、現象素について「ある語が指す外界のもの、動き、属性などで、五感で直接に捉えることができるものである」（1995:40）と定義付けている。それに基づいて、国広（1997）は「トル」の現象素として、「どこかに置いてある物を手でつかんで、そこから引き離す」という動作を考えている。また、この現象素は「把握」、「獲得」、「除去」という3つの認知的要素に分解することができる。そして、心理的にその現象素のどの部分に注目するかによって「トル」の解釈が異なると主張している。すなわち、「トル」の多義的な用法は「焦点化」によって生じるということである。

松田（2006）は国広（1997）の分析を出発点とし、認知意味論のコア図式理論を用いて、「トル」の語彙情報に含まれる移動と操作・処理の要素に注目し、「トル」の基本的な意味をより抽象的に捉えた分析を提示している。「トル」のコア図式を『元ある場所・状況（移動元）』から対象を『主体のコントロール可能領域（移動先）』に移し、それを意図・状況に適うように扱うことであると提案した上で、「移動元」「移動」「移動先」「操作・処理」のいずれに焦点を置くかによって「トル」の多義的な用法が生じると指摘している。

なお、国広（1994）も松田（2006）も「トル」が表す動作とその結果については考察しているが、「トル」がどのような名詞句を目的語とした場合、どのような解釈が生じるのかについては十分な考察が行われていない。そこで、本稿は、「トル」が表す動作行為に「移動」と「処理・操作」という二つの要素が含まれていると考え、生成語彙意味論の観点から「トル」と目的語名詞句の共起関係を注目して、考察を行う。

次節では、本稿で取り扱う理論的枠組みを提示する。

### 4. 理論枠組み

生成語彙意味論とは、言語の多義性の構造を、生成的な意味構築の理論から展開し、認知的なアプローチを含みながら分析する語彙的な意味理論である。生成語彙意味論は、語の意味を最もよく説明できる語彙項目と関連している特性や事象をクオリアと呼ばれる表示レベルで捉え、事象構造、項構造というよ

うな統語構造のインターフェイスを想定しており、それらに基づいて語の意味が合成的に生成される仕組みを説明している (Pustejovsky:1995、小野:2005、Pustejovsky & Jezek:2016)。

現在のほとんどのレキシコンおよび語彙意味論の理論では、レキシコンが単なる語彙項目をランダムに並べたリストではなく、構造化された体系であると想定されている (小野:2005)。Pustejovsky (1995) は、語彙項目を構造された体系に捉えるため、アリストテレスの四原因(「形相因」「質料因」「動力因」「目的因」)を生成語彙意味論に取り入れて、クオリアを(7)のように提案している。

- (7) 構成役割 (Constitutive) : 物体とそれを構成する部分の関係。  
 形式役割 (Formal) : 物体を他の物体から識別する関係。  
 目的役割 (Telic) : 物体の目的と機能。  
 主体役割 (Agentive) : 物体の起源や発生に関する要因。  
 (Pustejovsky 1995:76; 日本語訳は小野 (2005) による)

例えば、*car*の構成役割はそれを構成する部分である。*roof*の構成役割(逆構成役割)は全体としての建物である。*water*の形式役割は*liquid*、*stone*の形式役割は*physical object*、*car*の形式役割は*artifact*である。食べ物*cake*の目的役割は*eat*、書く道具*pen*の目的役割は*write-with*である。*house*の主体役割は*build*というイベントであり、*novel*の主体役割は*write*というイベントである。

なお、Pustejovsky (1995) は動詞のクオリア構造は名詞のクオリア構造に関する解釈とは異なると指摘している。Pustejovsky (1995) は*break*を取り上げて、動詞のクオリア構造における形式役割や主体役割がどのように解釈されるのかについて説明している。

$$(8) \quad \left[ \begin{array}{l} \text{break} \\ \text{EVENTSTR} = \left[ \begin{array}{l} E_1 = e_1: \text{process} \\ E_2 = e_2: \text{state} \\ \text{RESTR} = \langle \alpha \end{array} \right] \\ \text{QUALIA} = \left[ \begin{array}{l} \text{FORMAL} = \text{broken}(e_2, y) \\ \text{AGENTIVE} = \text{break\_act}(e_1, x, y) \\ \dots \end{array} \right] \end{array} \right]$$

(Pustejovsky 1995:80)



(8) は *break* の事象構造とクオリア構造である。事象構造は動詞の語彙項目に含まれている各事象の間の時間的な関係を表す。Pustejovsky (1995) は動詞の事象を過程 (Process) と状態 (State) と推移 (Transition) という三つのタイプに分類している。そのうち、過程と状態は単一の事象構造を形成し、推移は過程と状態を組み合わせた複合事象構造を形成する。複合事象構造は二つ以上の下位事象 ( $e_1$  と  $e_2$ ) が時間の流れに沿って構成されたものである。それらの下位事象間の時間的な関係は包括的順序部分関係 ( $e_1 < \infty e_2$ 、例えば: *build*)、包括的重複部分関係 ( $e_1 \circ \infty e_2$ 、例えば: *marry*)、包括的順序重複関係 ( $e_1 < \circ \infty e_2$ 、例えば: *chase*) という三つに分類されている。(8) では、*break* は因果関係を持つ使役動詞であるため、「過程」と「状態」という複数の事象を持っている。そのうち、*break* という動詞の動作行為や過程を表す事象はその主体役割と見なされ、 $break\_act(e, x, y)$  で表示されている。 $x$ 、 $y$  は *break* の項で、それぞれに動作主 (Agent) と対象 (Patient) としての役割を果たしている。動詞の動作行為による結果状態を表す事象は形式役割とみなされ、 $broken(e, y)$  で表記される。対象  $y$  の最終的な状態を表している。また、*break* の主体役割の事象は形式役割の事象に先行している。

次に、*build a house* の構造を (9) に示し、動詞と名詞の語彙構造の計算がどのように行われるのか、目的語名詞句に含まれる情報が動詞の意味にどのように影響するかを見る。

(9) build a house

build a house	$\left[ \begin{array}{l} \text{ARG}_1 = \boxed{\text{I}} \left[ \begin{array}{l} \text{animate\_ind} \\ \text{FORMAL} = \text{physobj} \end{array} \right] \\ \text{ARGSTR} = \left[ \begin{array}{l} \text{ARG}_2 = \boxed{\text{Z}} \left[ \begin{array}{l} \text{artifact} \\ \text{CONST} = \text{material ...} \\ \text{TELIC} = \text{live\_in} \\ \text{FORMAL} = \text{physobj} \end{array} \right] \\ \text{D - ARG} = \boxed{\text{X}} \left[ \begin{array}{l} \text{material} \\ \text{FORMAL} = \text{mass} \end{array} \right] \end{array} \right] \\ \text{EVENTSTR} = \left[ \begin{array}{l} \text{E}_1 = e_1: \text{process} \\ \text{E}_2 = e_2: \text{state} \\ \text{RESTR} = < \infty \end{array} \right] \\ \text{QUALIA} = \left[ \begin{array}{l} \text{FORMAL} = \text{exist}(e_2, \boxed{\text{Z}}) \\ \text{TELIC} = \text{TELIC of 2} \\ \text{AGENTIVE} = \text{build\_act}(e_1, \boxed{\text{I}}, \boxed{\text{X}}) \end{array} \right] \end{array} \right]$
---------------	--



(9) の *build* は動作主、対象、材料といった3つの項を持っている。項選択方法における「選択タイプ一致」と「下位タイプ受容」(Pustejovsky:2011)によって、動作主の「人」を項①に、目的語の「家」を項②に、家を建てるための材料を項③に代入することができる。そこで、*build*の主体役割は「建てる」という動作行為で、形式役割はその動作の結果であり、「家が存在する」ということになる。さらに、その目的役割は *house*の目的役割をそのままに引き継ぐもので、「住む」となる。

次節では、(9)の構造に倣い、「トル」の語彙構造とその対象の語彙構造及び、それらの計算によって動詞句の構造を提案しつつ、「トル」の内項共起制限を考察する。

## 5. 「トル」の語彙構造

本節では、生成語彙意味論の理論枠組みを踏まえて、「トル」と目的語名詞句の語彙構造を提案し、それらの意味計算から、「トル」の内項共起制限を明らかにする。

第2節の構文分析から次の2点を確認する。①「トル」は「移動」と「役割の実現」という2つの動作行為を意味している。②「移動」から「獲得」と「除去」の意味が生じ、「役割の実現」から「操作」の意味が生じる。また、「トル」が表す「移動」には3種類ある。1つは、「動作主あるいはその手の延長線上への移動」であり、「トル」は「獲得」と解釈される。残りの2つは「元の場所からの移動」とその中に含まれる「動作主からの移動」で、これらの場合、「トル」の解釈は「除去」となる。さらに、「操作」は、「トル」の対象が「トル」との共起によって操縦されたり、その機能が実現したりすることを表す。辞書にはこれらとは異なる多様な意味も掲載されているが、それらは究極的にこれら3つの意味に帰すると主張する。そこで、本稿は「トル」の意味を「獲得」意味群、「除去」意味群、「操作」意味群に分類し、それぞれの意味構造を提案する。

### 5.1 「獲得」意味群における「トル」の語彙構造

本稿では、「移動」の要素から考えて、「獲得」意味群における「トル」の語彙構造を(10)のように仮定する。

(10) トル（獲得）

$$\left[ \begin{array}{l} \text{toru (kakutoku)} \\ \text{ARGSTR} = \left[ \begin{array}{l} \text{ARG}_1 = \text{I: animate} \\ \text{ARG}_2 = \text{II: entity} \\ \text{D- ARG} = \text{III: entity} \end{array} \right] \\ \text{EVENTSTR} = \left[ \begin{array}{l} \text{E}_1 = \text{process} \\ \text{E}_2 = \text{state} \\ \text{E}_3 = \text{state} \\ \text{Restr} = <_{\alpha} (\text{E}_1, (\text{E}_2, \text{E}_3)) \end{array} \right] \\ \text{QUALIA} = \left[ \begin{array}{l} \text{FORMAL} = \neg \text{be\_at}(\text{E}_2, \text{II, III}) \cap \text{be\_at}(\text{E}_3, \text{II, III}) \\ \text{AGENT} = \text{act\_on}(\text{E}_1, \text{III, II}) \end{array} \right] \end{array} \right]$$

(10) では、項①は動作主、項②は対象物、項③は移動の起点である。また、「トル」の「獲得」意味群では、移動の着点はいつも動作主の領域にあるため、項①と同定される。さらに、この場合「トル」の語彙構造には3つの事象が存在している。E<sub>1</sub>は、主体役割に含まれる事象であり、「動作主が対象に働きかける」という過程を表す。E<sub>2</sub>とE<sub>3</sub>は動詞句の形式役割に含まれる事象である。E<sub>2</sub>は動詞句に含意される事象で、「対象が元の場所からなくなる」という意味を表し、E<sub>3</sub>は主事象で、「対象が動作主の領域に位置する」という意味を表す。E<sub>1</sub>はE<sub>2</sub>とE<sub>3</sub>に先行し、E<sub>2</sub>とE<sub>3</sub>は同時に発生する。

次に、「帽子」の語彙構造を(11)に提案し、(12)を分析する。

(11) 帽子

$$\left[ \begin{array}{l} \text{boshi} \\ \text{ARGSTR} = [\text{ARG} = \text{x: artifact\_obj}] \\ \text{QUALIA} = \left[ \begin{array}{l} \text{FORMAL} = \text{x} \\ \text{CONST} = \text{material ...} \\ \text{TELIC} = \text{be\_at}(\text{e}_2, \text{x}, \text{z: head of someone}) \\ \quad \cap [\text{protect}(\text{e}_3, \text{x}, \text{z}) \cup \text{decorate}(\text{e}_4, \text{x}, \text{z})] \\ \text{AGENT} = \text{make}(\text{e}_1, \text{n}, \text{x}) \end{array} \right] \end{array} \right]$$

(12) 太郎は帽子をとって出かけた。

(11) では、「帽子」は人工物であり、その目的役割は「頭に被ることで、頭の保護や装飾の役割を果たす」という意味を表す。(12) は「太郎は帽子を元の場所（帽子掛けなど）から自分の手またはその延長線上に移動する」ということを含意している。この場合、「とる」は「獲得」を意味する。そこで、(12) における「帽子をとる」の構造を (13) と仮定する。

(13) 帽子をとる（獲得）

boshi wo toru (kakutoku)																	
ARGSTR =	<table style="border-collapse: collapse; width: 100%;"> <tr> <td style="padding: 5px; vertical-align: middle;">ARG<sub>1</sub> = □ =</td> <td style="padding: 5px;"> <table style="border-collapse: collapse; width: 100%;"> <tr> <td style="padding: 5px;">animate</td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">FORMAL = human</td> </tr> </table> </td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px; vertical-align: middle;">ARG<sub>2</sub> = □ =</td> <td style="padding: 5px;"> <table style="border-collapse: collapse; width: 100%;"> <tr> <td style="padding: 5px;">帽子</td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">ARGSTR = ARG = x: artifact_obj</td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">QUALIA =</td> <td style="padding: 5px;"> <table style="border-collapse: collapse; width: 100%;"> <tr> <td style="padding: 5px;">FORMAL = x</td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">CONST = material ...</td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">TELIC = be_at (e<sub>2</sub>, x, z: head of someone) ∩ [protect (e<sub>3</sub>, x, z) ∪ decorate (e<sub>4</sub>, x, z)]</td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">AGENT = make(e<sub>1</sub>, n, x)</td> </tr> </table> </td> </tr> </table> </td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px; vertical-align: middle;">D - ARG = □ =</td> <td style="padding: 5px;">location</td> </tr> </table>	ARG <sub>1</sub> = □ =	<table style="border-collapse: collapse; width: 100%;"> <tr> <td style="padding: 5px;">animate</td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">FORMAL = human</td> </tr> </table>	animate	FORMAL = human	ARG <sub>2</sub> = □ =	<table style="border-collapse: collapse; width: 100%;"> <tr> <td style="padding: 5px;">帽子</td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">ARGSTR = ARG = x: artifact_obj</td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">QUALIA =</td> <td style="padding: 5px;"> <table style="border-collapse: collapse; width: 100%;"> <tr> <td style="padding: 5px;">FORMAL = x</td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">CONST = material ...</td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">TELIC = be_at (e<sub>2</sub>, x, z: head of someone) ∩ [protect (e<sub>3</sub>, x, z) ∪ decorate (e<sub>4</sub>, x, z)]</td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">AGENT = make(e<sub>1</sub>, n, x)</td> </tr> </table> </td> </tr> </table>	帽子	ARGSTR = ARG = x: artifact_obj	QUALIA =	<table style="border-collapse: collapse; width: 100%;"> <tr> <td style="padding: 5px;">FORMAL = x</td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">CONST = material ...</td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">TELIC = be_at (e<sub>2</sub>, x, z: head of someone) ∩ [protect (e<sub>3</sub>, x, z) ∪ decorate (e<sub>4</sub>, x, z)]</td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">AGENT = make(e<sub>1</sub>, n, x)</td> </tr> </table>	FORMAL = x	CONST = material ...	TELIC = be_at (e <sub>2</sub> , x, z: head of someone) ∩ [protect (e <sub>3</sub> , x, z) ∪ decorate (e <sub>4</sub> , x, z)]	AGENT = make(e <sub>1</sub> , n, x)	D - ARG = □ =	location
ARG <sub>1</sub> = □ =	<table style="border-collapse: collapse; width: 100%;"> <tr> <td style="padding: 5px;">animate</td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">FORMAL = human</td> </tr> </table>	animate	FORMAL = human														
animate																	
FORMAL = human																	
ARG <sub>2</sub> = □ =	<table style="border-collapse: collapse; width: 100%;"> <tr> <td style="padding: 5px;">帽子</td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">ARGSTR = ARG = x: artifact_obj</td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">QUALIA =</td> <td style="padding: 5px;"> <table style="border-collapse: collapse; width: 100%;"> <tr> <td style="padding: 5px;">FORMAL = x</td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">CONST = material ...</td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">TELIC = be_at (e<sub>2</sub>, x, z: head of someone) ∩ [protect (e<sub>3</sub>, x, z) ∪ decorate (e<sub>4</sub>, x, z)]</td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">AGENT = make(e<sub>1</sub>, n, x)</td> </tr> </table> </td> </tr> </table>	帽子	ARGSTR = ARG = x: artifact_obj	QUALIA =	<table style="border-collapse: collapse; width: 100%;"> <tr> <td style="padding: 5px;">FORMAL = x</td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">CONST = material ...</td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">TELIC = be_at (e<sub>2</sub>, x, z: head of someone) ∩ [protect (e<sub>3</sub>, x, z) ∪ decorate (e<sub>4</sub>, x, z)]</td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">AGENT = make(e<sub>1</sub>, n, x)</td> </tr> </table>	FORMAL = x	CONST = material ...	TELIC = be_at (e <sub>2</sub> , x, z: head of someone) ∩ [protect (e <sub>3</sub> , x, z) ∪ decorate (e <sub>4</sub> , x, z)]	AGENT = make(e <sub>1</sub> , n, x)								
帽子																	
ARGSTR = ARG = x: artifact_obj																	
QUALIA =	<table style="border-collapse: collapse; width: 100%;"> <tr> <td style="padding: 5px;">FORMAL = x</td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">CONST = material ...</td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">TELIC = be_at (e<sub>2</sub>, x, z: head of someone) ∩ [protect (e<sub>3</sub>, x, z) ∪ decorate (e<sub>4</sub>, x, z)]</td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">AGENT = make(e<sub>1</sub>, n, x)</td> </tr> </table>	FORMAL = x	CONST = material ...	TELIC = be_at (e <sub>2</sub> , x, z: head of someone) ∩ [protect (e <sub>3</sub> , x, z) ∪ decorate (e <sub>4</sub> , x, z)]	AGENT = make(e <sub>1</sub> , n, x)												
FORMAL = x																	
CONST = material ...																	
TELIC = be_at (e <sub>2</sub> , x, z: head of someone) ∩ [protect (e <sub>3</sub> , x, z) ∪ decorate (e <sub>4</sub> , x, z)]																	
AGENT = make(e <sub>1</sub> , n, x)																	
D - ARG = □ =	location																
EVENTSTR =	<table style="border-collapse: collapse; width: 100%;"> <tr> <td style="padding: 5px;">E<sub>1</sub> = process</td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">E<sub>2</sub> = state</td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">E<sub>3</sub> = state</td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">Restr = &lt;<sub>∞</sub> (E<sub>1</sub>, (E<sub>2</sub>, E<sub>3</sub>))</td> </tr> </table>	E <sub>1</sub> = process	E <sub>2</sub> = state	E <sub>3</sub> = state	Restr = < <sub>∞</sub> (E <sub>1</sub> , (E <sub>2</sub> , E <sub>3</sub> ))												
E <sub>1</sub> = process																	
E <sub>2</sub> = state																	
E <sub>3</sub> = state																	
Restr = < <sub>∞</sub> (E <sub>1</sub> , (E <sub>2</sub> , E <sub>3</sub> ))																	
QUALIA =	<table style="border-collapse: collapse; width: 100%;"> <tr> <td style="padding: 5px;">FORMAL = ¬ be_at(E<sub>2</sub>, □, □) ∩ be_at(E<sub>3</sub>, □, □)</td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">AGENT = act_on(E<sub>1</sub>, □, □)</td> </tr> </table>	FORMAL = ¬ be_at(E <sub>2</sub> , □, □) ∩ be_at(E <sub>3</sub> , □, □)	AGENT = act_on(E <sub>1</sub> , □, □)														
FORMAL = ¬ be_at(E <sub>2</sub> , □, □) ∩ be_at(E <sub>3</sub> , □, □)																	
AGENT = act_on(E <sub>1</sub> , □, □)																	

「獲得」を意味する「帽子をとる」の構造では、「帽子」の移動の起点は帽子が元々置かれている場所である。「帽子をとる」の形式役割は「帽子が元の場所になくなり、動作主の手またはその延長線上に移動して存在するようになる」という意味を表す。

本節の分析では、「獲得」を意味する「トル」が対象と共起する際に、動詞句の形式役割は「対象が元の場所からなくなる」と「対象が動作主の手またはその延長線上に位置する」という2つの事象によって定義され、移動の着点はいつも動作主の領域にあることが明らかになった。

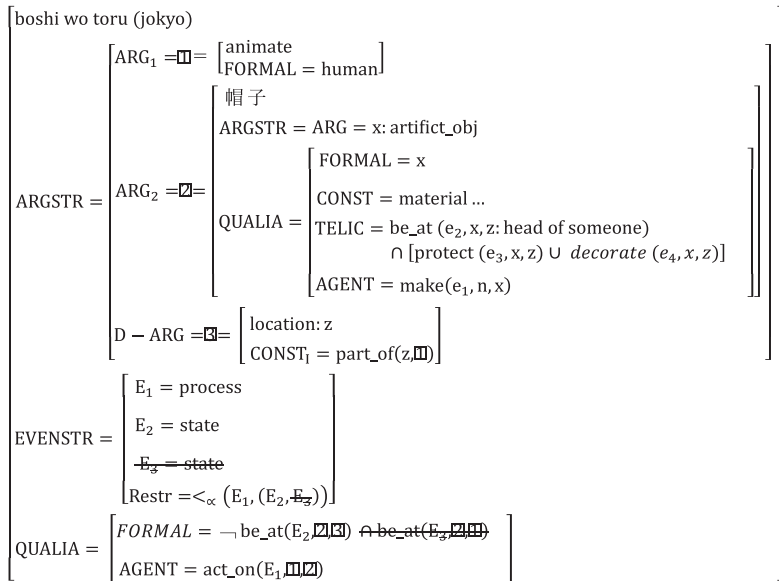
## 5.2 「除去」意味群における「トル」の語彙構造

文脈によって、「トル」は「除去」と解釈される場合もある。(14)では、「帽子をとる」は「頭に被っている帽子を脱ぐ」と解釈され、「トル」は「除去」を意味し、意味構造は(15)で示される。

(14) 室内では帽子をお取りください (=脱ぐ)。

(『例解同訓異字用法辞典』2003:343)

(15) 帽子をとる (除去)



(15)では、動作主の頭は移動の着点ではなく、移動の起点である。そのため、「トル」の形式役割は「動作主の領域に移動して存在する」という事象が削除され、「帽子が元の場所になくなる」という事象のみで定義される。従って、「除去」を意味する「トル」の語彙構造は(16)になる。

(16) トル (除去)

$$\left[ \begin{array}{l} \text{toru (jokyo)} \\ \text{ARGST} = \left[ \begin{array}{l} \text{ARG}_1 = \text{I: animate} \\ \text{ARG}_2 = \text{II: entity} \\ \text{D - ARG} = \text{III: location} \end{array} \right] \\ \text{EVENSTR} = \left[ \begin{array}{l} \text{E}_1 = \text{process} \\ \text{E}_2 = \text{state} \\ \text{Restr} = <_{\alpha} (\text{E}_1, \text{E}_2) \end{array} \right] \\ \text{QUALIA} = \left[ \begin{array}{l} \text{FORMAL} = \neg \text{be\_at}(\text{E}_2, \text{II}, \text{III}) \\ \text{AGENT} = \text{act\_on}(\text{E}_1, \text{II}, \text{II}) \end{array} \right] \end{array} \right]$$

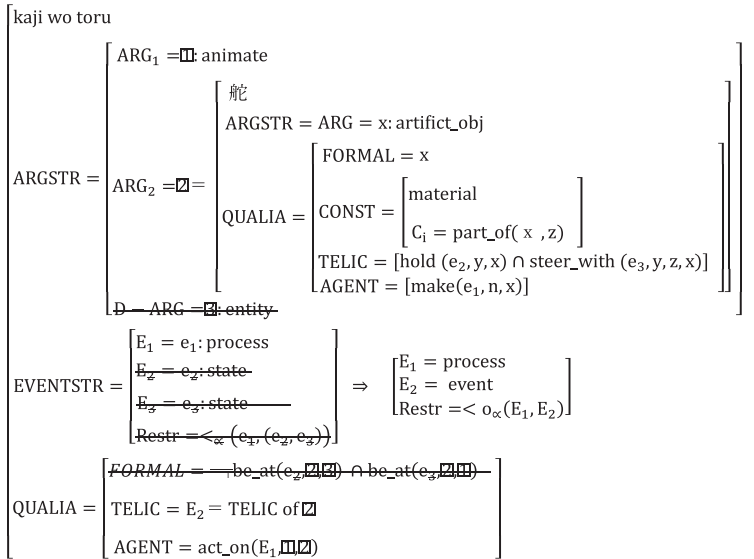
5.3 「操作」意味群における「トル」の語彙構造

「操作」は「トル」の3つの意味群の中で一番抽象的なものである。本節では「舵」の意味構造を(17)、「舵をとる」の意味構造を(18)に仮定し、「かじ」と「トル」の語彙構造の意味計算を行って分析した上で、「操作」意味群における「トル」の語彙構造を提案する。

(17) 舵

$$\left[ \begin{array}{l} \text{kaji} \\ \text{ARGSTR} = \text{ARG} = \text{x: artifact\_obj} \\ \text{QUALIA} = \left[ \begin{array}{l} \text{FORMAL} = \text{x} \\ \text{CONST} = \left[ \begin{array}{l} \text{material} \\ \text{C}_1 = \text{part\_of}(\text{x}, \text{z}) \end{array} \right] \\ \text{TELIC} = \text{hold}(\text{e}_2, \text{y}, \text{x}) \cap \text{steer\_with}(\text{e}_3, \text{y}, \text{z}, \text{x}) \\ \text{AGENT} = \text{make}(\text{e}_1, \text{n}, \text{x}) \end{array} \right] \end{array} \right]$$

(18) 舵をとる



「舵」は人工物で、「手に持つことで船を操縦する」という目的役割を持っている。「舵」は「船」の一部であり、簡単に移動することができないため、第2節で提示したように、特別な文脈がなければ、「舵をとる」は「舵を操作する」という意味を表す。また、船から舵を除去すると、船を操作できなくなるため、「舵をとる」における「トル」の「除去」と「操作」の意味は排他的である。よって、(18)では、起点を表す項[3]が消えて、動作の結果状態を表す形式役割もなくなる。「活用による強制」と「選択（タイプ一致）」によって、「舵」の目的役割に含まれるイベントは「トル」の内項に同定される。この場合、「トル」は「舵」の目的役割を引き継いで、「操作」という意味が生じる。

さらに、「舵をとる」の構造から「トル」の部分を引き出すと、「操作」意味群における「トル」の語彙構造は(19)になる。この場合、対象である項[2]のタイプはイベントである。

(19) トル (操作)

$$\left[ \begin{array}{l} \text{toru (sosa)} \\ \text{ARGSTR} = \left[ \begin{array}{l} \text{ARG}_1 = \text{III: animate} \\ \text{ARG}_2 = \text{II: event - function} \end{array} \right] \\ \text{EVENSTR} = \left[ \begin{array}{l} \text{E}_1 = \text{process} \\ \text{E}_2 = \text{event} \\ \text{Restr} = < \text{o}_\alpha(\text{E}_1, \text{E}_2) \end{array} \right] \\ \text{QUALIA} = \left[ \begin{array}{l} \text{TELIC} = \text{E}_2 = \text{TELIC of II} \\ \text{AGENT} = \text{act\_on}(\text{E}_1, \text{III, II}) \end{array} \right] \end{array} \right]$$

つまり、「トル」は「操作」を意味する際に、対象の目的役割に含まれるイベントを活用している。また、「トル」の「操作」意味群における各意味は、「獲得」と「除去」の意味群よりも抽象的で、常に文脈に依存し、各意味の間の結びつきも弱い。

5.4 まとめ

本稿は、『日本語基本動詞用法辞典』における「とる」の文型を分析した上で、「とる」の多義的な用法の特徴を詳細に考察し、「動作主の手の延長線上の移動」、「元の場所からの移動」、「動作主からの移動」、「役割の実現」に再分類した。また、この分類に基づいて、「とる」の語彙構造を仮定し、対象の語彙構造との意味計算を行った。その結果を(20)にまとめる。

- (20) a. 「獲得」意味群では、「トル」が対象の形式役割に含まれる情報をターゲットとする。動詞句の形式役割は  $\neg be\_at(E_2, [2], [3])$  と  $be\_at(E_3, [2], [7])$  の二つの事象によって定義される。この場合、「トル」の意味は「手に入れる」「奪う」「補充する」「選択」など様々であるが、いずれにしても、対象は他のところから動作主、または動作主の手の延長線上に移動する。
- b. 「除去」意味群では、「トル」が対象の形式役割に含まれる情報をターゲットとするが、その動詞句の形式役割は  $\neg be\_at(E_3, [2], [3])$  という単一事象のみを持つ。この場合、「トル」はその対象が元の場所から、または動作主のところから離れるまでを意味するが、その着



点を明示しない場合が多い。

- c. 「操作」意味群では、「トル」が、対象の目的役割に含まれる情報をターゲットとして活用する。この場合、「トル」が要求する項のタイプはイベントである。

以上、本節では、「トル」は、単一タイプの項を持つ対象と共起する際に、対象の形式役割に含まれる情報、または目的役割に含まれるイベントのいずれを項とするかにより、その意味解釈が「獲得」「除去」「操作」という3つの意味群に分かれることを明らかにした。次の節では、「トル」の3つの意味群の関係を考察し、本稿の結論と今後の課題をまとめる。

## 6. 考察、結論と今後の課題

本稿は生成語彙意味論の枠組みで、「とる」の多義分析を行い、目的語の語彙構造に複数含まれる情報の中のいずれを項とするかにより、「トル」の意味解釈が変化することを明らかにした。「とる」は単一タイプの項を持つ対象と共起する際に、その形式役割に含まれる情報を項とすれば、「獲得」または「除去」の意味群が生じ、目的役割に含まれるイベントを項とすれば、「操作」の意味群が生じる。また、本稿の分析から、この三つの意味群の関係についても少しずつ明確になってきた。

国広（1997）で述べられているように、「トル」の「獲得」と「除去」は同一の動作を異なる視点から捉える意味であるため、「獲得」意味群と「除去」意味群の間には排他的な関係がある。また、5.3節での「舵をとる」の分析から「トル」の「除去」群と「操作」群にも排他的な関係があることがわかる。

では、「獲得」意味群と「操作」意味群の間にも排他的な関係があるだろうか。これを説明するために、「武器をとる」の解釈を考えてみよう。「武器をとる」はしばしば「戦う」と解釈されている。この場合、「武器」は具体的な物体ではなく、「戦えるために使える道具の総称」というような抽象的名詞であり、「トル」が「武器」の目的役割を引き継いでいる。もし「武器」が具体的な物体を指す場合、「武器をとる」は「武器を手に入れる」と解釈されることができる。例えば、「住民は倉庫から武器をとった」では、「とった」は「武器の移動」だけを表し、操作の意味を表さない。つまり、動作主が武器に手を出して、それ

を握るまでは「武器を手に入れる」という動作であり、動作主が武器を握った直後に戦い始めるとしても、その動作はすでに「獲得」ではなく、「操作」であるため、「トル」の「獲得」意味群と「操作」意味群は排他的である。

また、本稿の分析により、「トル」が対象の形式役割における情報を利用する場合、その対象の目的役割に含まれる情報を同時に利用することはできず、逆に、「トル」は対象の目的役割に含まれる情報を利用する場合も、同時にその形式役割に含まれる情報を利用することができないと言える。

以上、本稿は「トル」と対象の語彙構造の意味計算を行うことで、目的語の語彙構造に複数含まれる情報の中のいずれを項とするかにより、「トル」の意味解釈が変化することを明らかにした。これは、生成語彙意味論が提唱した動詞と対象の語彙構造の意味計算が複雑な言語情報を整理することを可能にし、分析の恣意性を回避できることを示唆している。また、本稿では、「トル」の意味を「獲得」「除去」「操作」という3つの意味群に分類し、この3つの意味群はそれぞれ排他的であり、「トル」の動詞句の構造には形式役割と目的役割が同時に現れることはないことを明らかにした。これは「トル」のすべての意味を一つの語彙意味構造や概念に含めることが困難であることを示唆しているが、「トル」のそれぞれの意味の間に関係性がないことを意味するわけではない。実際には、「トル」の「除去」「操作」の意味群のいずれも「獲得」といった意味群から派生したものである。なぜ一つの意味群からそれぞれ異なる意味群を生み出すのか。それは、「獲得」が「トル」の基本義であり、異なる目的語名詞句と共起することで、その語彙構造に含まれる情報の一部を限定したり、そこに欠落した情報が補完されたりして、新たな語義が生まれるからである。このことは「動詞の多義性は動詞の単一の意味と、それと共起する項に含まれるクオリア構造の計算によって動詞の多義が派生される」という生成語彙意味論の基本仮説を裏付けている。

一方、「トル」以外の多義動詞のそれぞれの意味にも排他性があるかどうかはまだ明確になっていない。従って、より多くの多義動詞を取り上げ、どのような多義動詞の語彙構造には排他性があるか、どのような多義動詞の語彙構造には排他性がないかについては、慎重に検討していく必要がある。また、「トル」が複合タイプの項を持つ対象（例えば、「メモをとる」）と共起する際にどのような分析になるのかもまだ明確になっていない。これらは今後の研究課題である。

## 注

- <sup>1</sup> 本稿は筆者が執筆した2022年神田外語大学大学院修士論文をもとに加筆したものである。岩本先生には、修士課程から多くの助言やご指導をいただいた。この場を借りて心より御礼を申し上げる。本稿の内容は、全て筆者の責任である。

## 参考文献

- 小野尚之（2005）『生成語彙意味論』くろしお出版。
- 片山きよみ（2005）「日本語他動詞の再帰的用法について」『熊本大学言語学論集』（4），325-369, 2005 熊本大学文学部言語学研究室。
- 国広哲弥（1995）「語彙論と辞書学」『月刊言語』24(6)号，38-45。
- 国広哲弥（1997）『理想の国語辞典』大修館書店。
- 松田文子（2006）「コア図式を用いた多義動詞「とる」の認知意味論的説明」『日本語科学』19, 119-132 国立国語研究所。
- Pustejovsky, James (1995) *The Generative Lexicon*. Cambridge, MA:MIT Press.
- Pustejovsky, James (2011) “Coercion in a General Theory of Argument Selection.” *Linguistics*49 (6) : 1401-1431.
- Pustejovsky, James & Jezek, Elisabetta. (2016) *A Guide of Generative Lexicon Theory* (Chapter 2 Introducing Qualia Structure: 3-45). Oxford University Press.

## 辞書

- 小泉保編（1989）『日本語基本動詞用法辞典』初版 大修館書店。
- 浅田秀子（2003）『例解同訓異字用法辞典』東京堂出版。